

「シジュウカラの営巣(10)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka



オス親も、日中は5分に1回ぐらいのペースで餌を持って来る。メス親に口移して餌を渡すと、すぐに巣箱から出て、また「出勤」である。餌のほとんどはヒナの口に入るが、時々メス親自身が食べてしまうこともある。



運び込まれる餌は、小さなクモ類、バッタの幼虫など多彩だが、ほとんどは昆虫の幼虫だ。特にヒナが小さいうちは、虫を丸ごと口に入れることはできないので、幼虫の体液を絞り出して与えることになる。上の写真では、オス親から受け取った餌(幼虫)の大きさを推定できる。シジュウカラは体調15cm程度、頭の幅は3cm程度なので、幼虫の体調は2cmぐらいだ。小型のチョウやガ、または若齢の幼虫だろう。時には数匹いっぺんにくわえて戻ることもある。



この季節、このあたりに多いのは、シャクガの仲間の幼虫だ。尺取虫が育った成虫が、シャクガ(尺蛾)である。幼虫のほうも生きるのに必死で、天敵に遭遇すると、「重力」と「糸」という武器で、一気に枝から落下する。地面に落ちてしまうと木に戻れないので、こうして自分で吐いた糸をたぐって登るのだ。



シャクガは種類が多く、小型で美しい。親鳥は、成虫を食べることもある。上が「ヒメツバメエダシャク(姫燕枝尺) *Ourapteryx subpunctaria*」、下が「トラフツバメエダシャク(虎斑燕枝尺)、*Tristrophis veneris*」いずれもやや稀なシャクガである。